

38 小園 216
光村

垣内松三著

教育部
資料室

ごむまり

しんこくご二年中

文部省検定済教科書

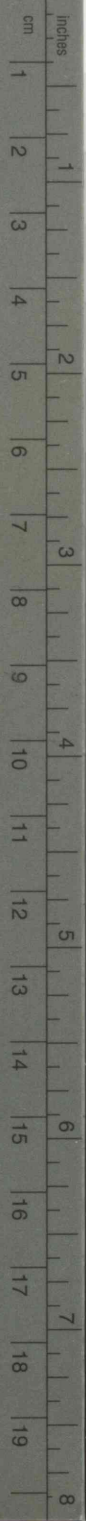


教科
34
013



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60311

60311

教科書文庫

6
810
34-1949
01304 49762



指導者のために

- (一) この本は、上巻の趣意を更に拡めると共に、読書力を高め、創作力を養うために、児童の言語の発達に即して、詩・物語・劇等を多く提出した。興味を助長しながら、児童の言語に対する理解・態度・技能を有機的・発展的に養うように努めた。
- (二) この本の内容は、いろいろな言語活動を季節的な生活の変化に応じて統一してあるが、次の四つの題目に分かれている。
 - 一、まつの木
 - 海浜に取材して詩・物語・劇等を提出した。史的物語によつて公益心を養い、傳説によつて感情を豊かにしながら、多様な言語経験に導くための糸口とした。
 - 二、ごむまり
 - 児童の運動・遊戯に取材して詩・劇等を提出した。日常生活を中心に、ことばと行動によつて眞実の表現に導き、正しい言語習慣を養うことにした。
 - 三、月の光
 - 秋の自然を主題として、詩・物語等を提出した。豊かな情操を養いながら興味の水準を高めて言語能力を伸ばすことにした。
 - 四、みんなの本
 - 文庫に取材して、生活文・寓意に富んだ物語。書物に対する関心を高めると共に、前課んだ物語に対して、やや思索的な説物によつて教養を高めることにした。
 - (三) この本に提出した新出語は一八〇語で、毎頁の新語率は二・一四語である。学習の手引・新語表・新字表を掲げて図ると共に、特に片かな「五十音表」をも掲げて片かなの習熟にも留意した。
 - (四) この本でもさし絵は重要な位置を占めるので指導上充分に留意された。
 - (五) この本の使用期間は、大体九月（地方によつては八月）から十二月までを目標として、大題目を平均一か月宛とし固執する必要はない。地方の実情に即し、児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。

広島大学図書
0130449762



贈 寄

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449762

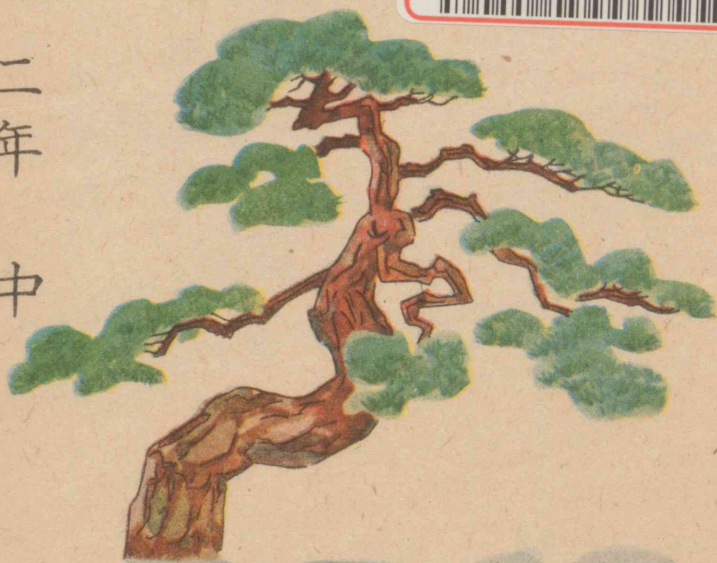
昭和二十四年十月十日
文部省検定済
小学校国語科用

広島大学図書
0130449762



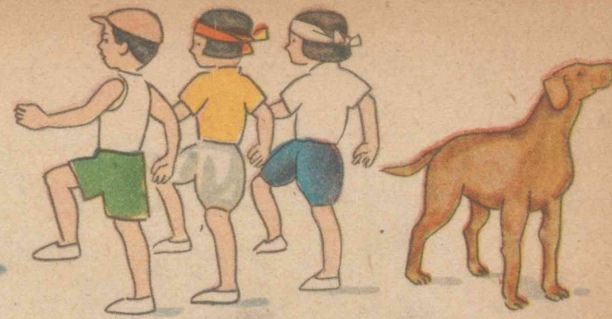
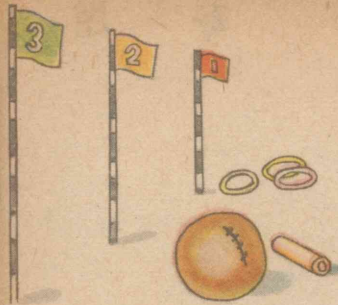
ごむまり

しんこくご 二年 中



広島大学
教育学部図書





四

みんなの本

73

(一) 文この本
(二) 読んだ本

木の年
ねずみのちえ
ろばと親子

学しゅうの手びき
あたらしいことば
かん字

三

月の光

51

(一) 月の光
(二) かたつむり
(三) 月夜のからす

二

ごむまり

29

(一) たまのふん水
(二) はれた日
(三) ごむまり

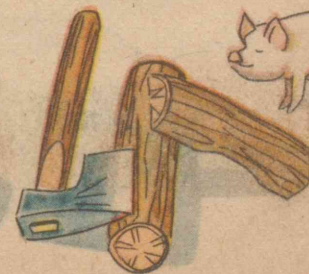
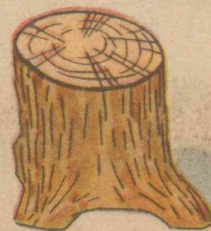
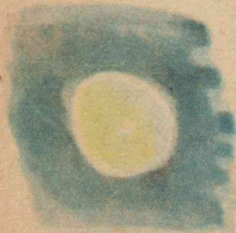
一

まつの林

4

(一) すなはま
(二) まつの林
(三) はごろも

もくろく



一 まつの 林

(一) すなはま

ひろい すなはま。

すなはまの むこうは 海だ。

「おうい」と さけびたく なった。

「おうい」「おうい」と さけんだ。

すなはまを 走って いく。

はだしに なって、走って いく。

「おうい」「おうい」と さけびながら、

みんなで 走って いく。

波も 手を つないで、

光りながら 走って くる。

ざぶんと くだける。

かもめが ひらりと まいあがる。





風が 波の 上を ふいて くる。
 うたいながら かけて くる。
 先生の ワイシャツを ふくらせ、
 女の子の かみの 毛に おどる。

青い、青い、海だ。

ひろい、ひろい、空だ。

空と 海との あいだを、

まっ白な きせんが いく。



(二) まつの 林

まさおさんたちは、海から かえる
 時、まつの 林を 通って きました。

先生が、

「この まつの 林が、どんなに し
 て できた ものが、おはなしを
 して あげましよう。」

とおっしゃって、まつの根もとに おすわりに
なりました。みんなも、先生を かこんで すわりま
した。

むかし、このあたりは、海から 強い 風が ふ
くと、すなの ふぶきに なったものです。

すなふぶきになると、田も はたけも すなに
うずめられて しまいました。

それで、だれも 田や はたけを つくらなく な

って しまいました。

栗田^{くりた}さんと いう 人が ありました。

どうにか して、すなの ふぶきを くいどめたいと
思いました。

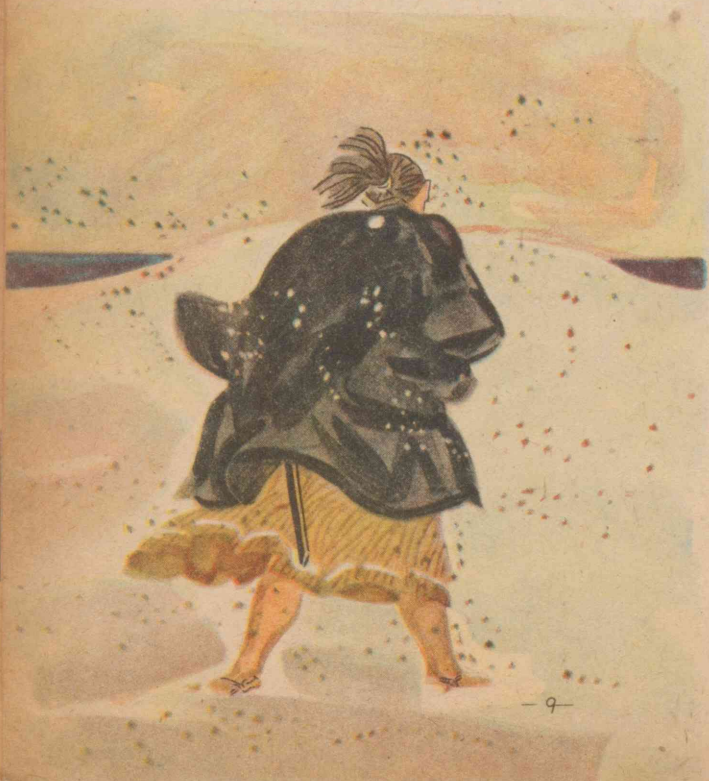
まつの 林を つくる

ことに しました。まつ

の なえを、たくさん

うえて みました。

ところが、風が ふく



と、まつの なえは すなにも うずめられて、みんな
かれて しまいました。

ある日、栗田さんが すなはまを 歩いて いると、
一本の ぐみの 木が 目に つきまし
た。

気をつけて みると、ぐみの 木の
そばに、小さな わらの たばが うず
まって いました。それで すなを ふ
せいで いる ことが わかりました。



それに、ぐみの 木は すなじに 強い ことも
わかりました。

栗田さんは、わらの たばを たくさん ならべて、
ぐみの 木を うえました。ぐみの 木は よく そ
だちました。

それから、まつの なえを うえました。

こんどは、ぐみの 木で すなを ふせぐので、ま
つの なえも よく そだちました。

まつの 木は、しっかりと 根を はって、だんだ

ん 大きく なりました。

そして、こんな まつの

林と なったのです。

まつの 木が 大きく な

るに つれて、すなの ふぶ

きも とまりました。

先生の おはなしが おわ
りました。



まつの 林は、ふとい 根を はって 立ちならん

で いました。

ずっと 遠くに つづいて いました。風に ざわ

ざわと なって いました。

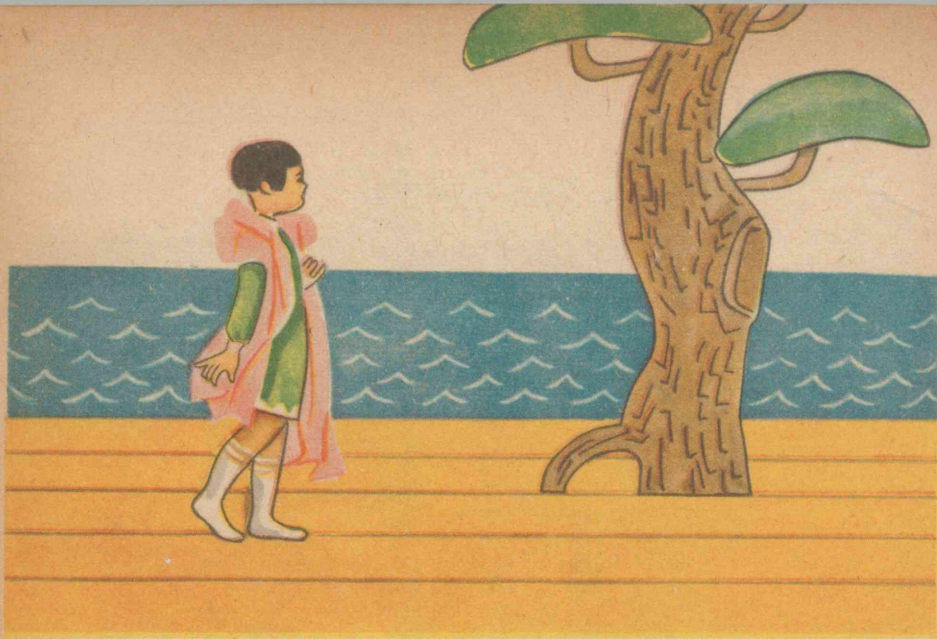
まつの 林を でると、田も はたけも 青々と

して いました。

きれいな 水も流れて いました。

まさおさんたちは 立ちどまって、もう 一ど ま

つの 林を ふりかえって みました。

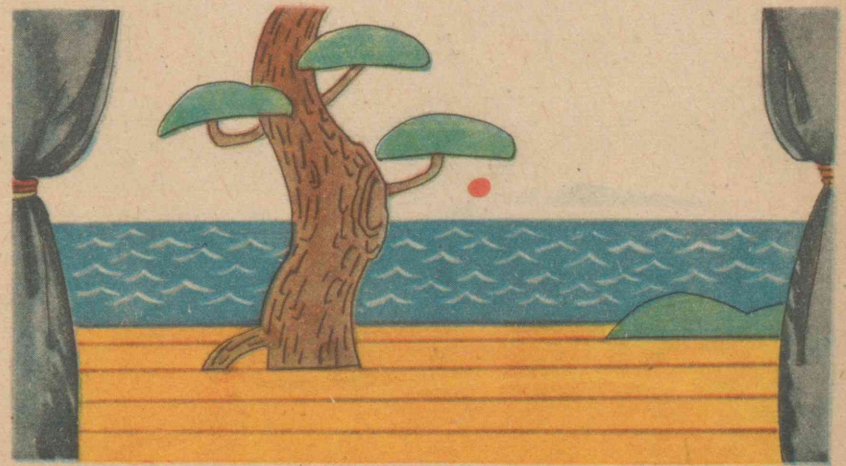


(三) はごろも

てる人 天人 ーりょうし
ところ ・ みほの まつ原

みんなの うた

みほの まつ原、白いすな。
風が そよそよ ふいて いる。



みほの まつ原、青い 海。
かもめ すいすい とんで いる。

みほの まつ原、光る 空。
ふじが ほんのり ういて いる。

天人が うたいながら でて きます。

風が わたしを よんだので、
あそびましょうと よんだので、

わたしは みほの まつ原に、
光の 中を まって きた。

波が わたしを よんだので、
あそびましようど よんだので
わたしは みほの まつ原に、
月の 国から まって きた。

天人は うたいながら、はごろもを ぬいで、まつの木に か

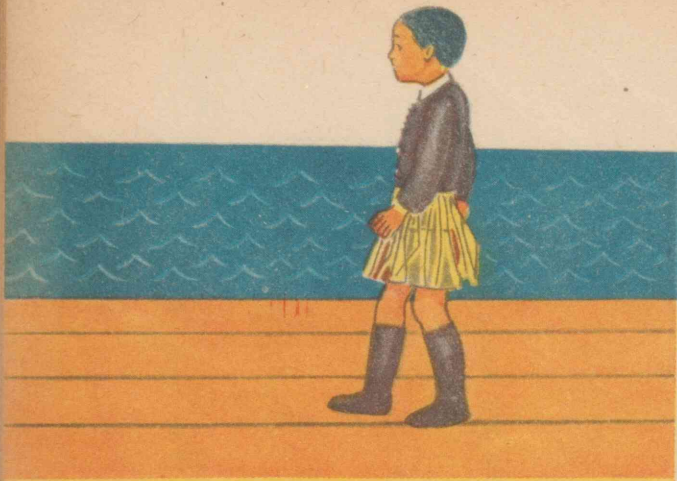


けます。そして、はまべの 方へ でて いきます。

その あとへ、ひとりの りょうしが うたいながら でて
きます。

うたが きこえる、やさしい うたが。
ふしぎな 声だ、いい 声だ。

花が さいたか、はまべの すなに。
ふしぎな におい、いい におい。



りょうしは、まつの木にかかっているきれいなはごろもをみつけます。

りょうし おや、なんだろう。(そばに よって はごろもを 手に
とって みます。) こんなきれいな きものは み
たことが ない。だれが おいて いったのだ
ろう。

りょうしは あたりを みまわします。

その時、天人の うた声が 近づいて きます。

波が わたしを よんだので、
あそびましようよと よんだので、
わたしは みほの まつ原へ、
月の 国から まって きた。

りょうしは その 声を きいて、まつの
かげに かくれます。

天人が きて、はごろもの ないのに
気が つきます。おどろいて、ひろって



きた かいがらを おとします。

天人 あつ、はごろもが ない。わたしの はごろも
が ない。

天人は あたりを さがします。

りょうしは、天人に みつからないように、まつの 木の まわり
を まわります。

天人は、かなしそくに 空を みあげて うたいます。

はごろも、はごろも。

どこに いったか、わたしの はごろも。

おしえて ください、海の 風。

さがして ください、まつの 風。

はごろも、はごろも。

どこに いったか、わたしの はごろも。

おしえて ください、波の 音。

さがして ください、かもめたち。

りょうしが、はごろもを もって でて
きます。

りょうし その はごろもと いう

のは これでしよう。

天人 あ、そうです。そうです。

りょうし こんな きれいな きも

のは、はじめて みまし
た。

うちの たからものに

します。おゆずり ください。

天人 いいえ、それは 天人の はごろもと 行って、

あなたがたには 用の ない ものです。

りょうし すると、あなたは 天人ですか。天人の はご

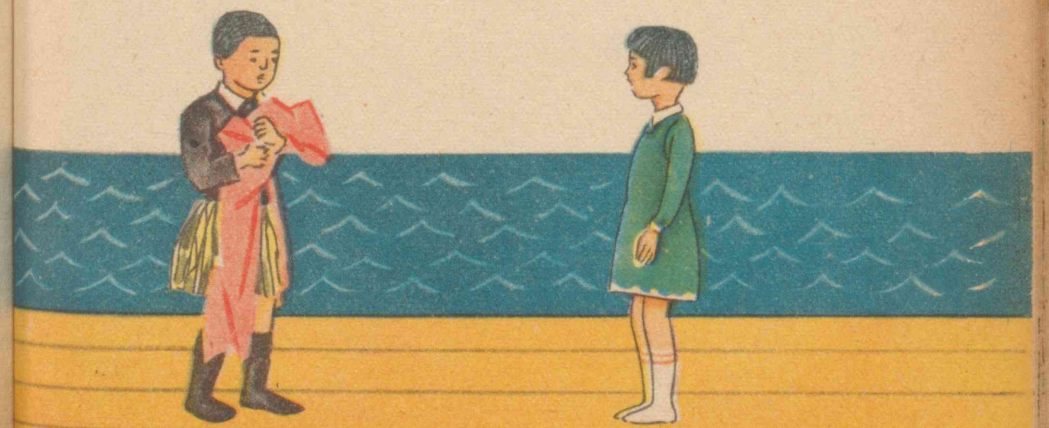
ろもと きいて、なお ほしく なりました。

どうぞ おゆずり ください。国の たからに

いたします。

天人 それがないと、わたしは 天へ かえる こ

とが できません。



はごろものない 天人は、はねをなくした
鳥と 同じです。

りょうし それは おきのどくです。おかえし しましよ
う。その かわり、まいを まって みせて
いただけませんか。天人は、まいが じょうず
ど きいて おります。

天人 はい。まいを まって お目に かけましよう。

りょうしは、はごろもを 天人に かえます。

天人は、うれしそうに かたに かけます。はごろもを ひら
ひら させながら、まいを まいはじめます。

春は たのしい おぼろ月。

月の 都の 天人たちは、

花を 手に 手に まいを まう。

夏は すずしい あまの川。

月の 都の 天人たちは、



星と いっしょに まいを まう。

秋は 十五や、まるい 月。

月の 都の 天人たちは、

ふえを ふきふき、まいを まう。

冬は ちらちら、雪の 空。

月の 都の 天人たちは、

白い ころもで まいを まう。

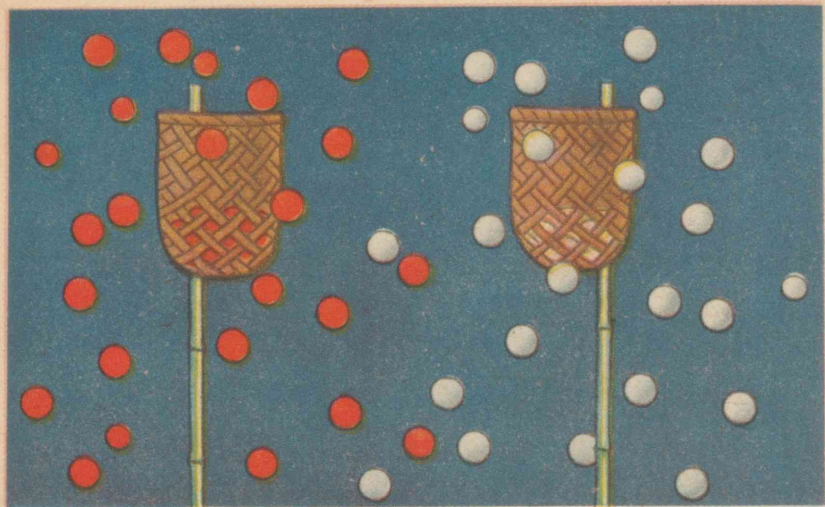


りょうしは 天人の まいに みとれて
います。

天人は まいを まいながら 行って
しまいます。

りょうしは、空に むかって 手を ふ
りながら うたいます。

さよなら、天に かえる 人。
風が あなたを おくります。



うんどう会の日、一年生は
 たい
 まいれでした。
 まさおさんも、きよ年、
 たまいれ
 をしたので、なつかしい
 気もち
 が
 しました。

二 ごむまり

(一) たまの ふん水

さよなら、月に かえる 人。
 雲が あなたを おくります。
 みんなの うた
 風に たもどが ひらひらと、
 まいを まいまい、空の上。
 みほの まつ原、光る 空。
 ふじが ほんのり ういて いる。



みんなでおうえんを しました。

一年生は、赤白の かごに むかって たまを なげました。 どんどん なげました。

赤い たまや、白い たまが、ふん水のように 青い 空に おどりしました。

かごには なかなか はいりません。 ひとつ はいるごとに、みんなが わあっと いいました。

まさおさんは、たまいの ようすを みじかい文に 書いて、先生に おみせしました。

はれた 空に、

赤い たまが どんどん あがります。

白い たまが どんどん あがります。

まつさおな 空に、

ふん水のように あがります。

先生が、

「よく書きましたが、まだ、よけいな ことばが

少し あるようです。考えて「ごらん。」
と おつしゃいました。

まさおさんは、たまひれの ようすを 思いだして、
いろいろ 書き なおして みました。

赤い たまが あがる。

白い たまが あがる。

赤白の たまが、

まつさおな 空に おどる。

まるで ふん水だ。

「あがります。」を「あがる。」に したり、「まるで ふん水」
だ。」と 書いたので、文に カが でて きたように
思いました。

けれども、つきから つぎに なげあげられて、か
この まわりに おどる たまの ようすが、まだ、
うまく 書いて いないように 思いました。いろいろ
ろ 考えて 書きなおしました。

できあがったので、先生に
おみせしました。先生
が ほめて くださいました。

赤い たま。

白い たま。

赤、白、赤、白、赤、白。

たまの ふん水。

まっさおな 空に、

たまの ふん水。

(二) はれた 日

リレー

しっかりと、バトンを
にぎって 走る。

走る。走る。

白い せんに そって、

わあっと いう 声の 中を。





ダンス

おどる、おどる。
 手をつないで おどる。
 わになって おどる。
 波のように
 ひろがって おどる。
 花のように
 ちぢまって おどる。

ねこねずみ

わになって ねこねずみ。
 ねこを 通すな。
 ねずみを にがせ。
 わを くぐって
 ねずみが にげる。
 ねこより 大きな
 ねずみが にげる。



とんぼ

みんな、どこへ いったらう。

げたが ニそく、

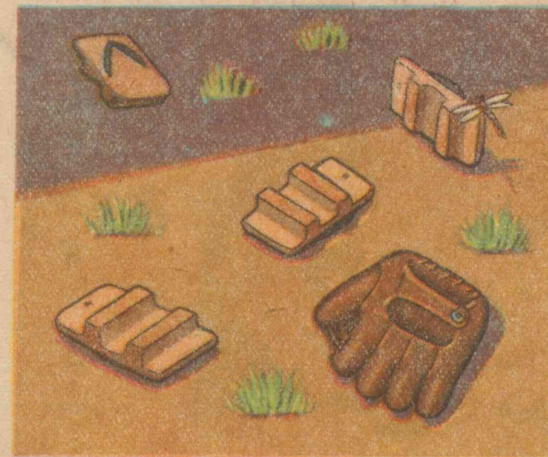
ひっくり かえって いる。

げたの そばに、

グローブが ひとつ。

とんぼが とんで きて、げたに とまった。

だれも いない へいの かげ。



(三) ごむまり

てる人 まさお ひさし けんきち きよし

てつお よしこ さちこ みどり

ところ 原っぱ

よく はれた ひるすぎです。

原っぱで、よしこさん、さちこさん、みどりさんが なわとびを

して います。

その うしろを、ごむまりが ぽんぽん

と はねて いきます。

ひさしさんが 走って きて、そこらを

さがします。

よしこ どうしたの、ひさしさん。

ひさし まりが どんで こなか

った。

よしこ まり。 さあ、なわとびを



して いたので、気が つかなかったわ。

ひさし たしか こっちへ きたんだがなあ。

みどり その へんの 草の 中じゃ ないかしら。

まさおさんと けんきちさんが 走って きます。

けんきち みつからないの。

ひさし もつと、さきの方かしら。

まさお この あたりだろう。そんなに 遠くへ いく

はずは ないよ。

よしこ わたしたちも さがして あげましようね。



みんなで そこらを さがします。

さちこ だれの まりなの。

まさお ぼくのごむまりさ。古く なって いるから、

気をつけて さがさないよ。 わからないよ。

みどり あら、こんな ものが。

ひさし なあに。

ひさしさんが、みどりさんの そばに よって いきます。みんな

みどりさんの 方を みます。

みどりさんが、小さな くつを ひろいあげます。

ひさし なあんだ。ごむまりじゃ

なかったのか。

さちこ まあ、かわいい くつ。

どうしたんでしよう、こ

んな ところに。

けんきち くろが くわえて きた

んじゃない。

よしこ くろは そんな いたず

らしいわ。ね、まさお

さん。

ひさし そんな ことより、早く ごむまりを さがそ
うよ。

てつおさんと きよしさんが きます。

てつお まだ みつからないの。

まさお これから さがすんだ。ぼくは あつちに い
つて みよう。

よしこ わたしは こつちを さがして みるわ。

みんなが わかれて さがしに いきます。きよしさんだけ のこって

あたりを さがして います。

きよしさんが、ポケットから あたらしい ごむまりを とりだして、
みて います。

そこへ、けんきちさんが かえって きて、きよしさんの もって
いる ごむまりを みます。

けんきち なあんだ、きよしさん。ごむまりを みつけた
の。

きよしさんは、その ごむまりを うしろに かくします。

きよし ちがうんだよ、これ。

けんきち だって、それ、ごむまりだろう。

けんきちさんは わらいながら、きよしさんの うしろに まわって
みようと、します。

きよし ごむまりは ごむまりだけど、——ほら、ちがう
だろう。

きよしさんは かくした ごむまりを みせます。

けんきち おや、あたらしいんだね、この まり。どうし
たの。

きよし きのう、おじさんから いただいたんだけど、
つかうのが おしかったんだよ。あした、学校
で みんなに みせてから つかおうと 思っ
たのさ。

けんきち そう。ぼく、きよしさんが まりを みつけて
いながら、知らない ふりを して、いたずら
して いるのかと 思ったよ。

きよし ごめんね。はじめは、みんなと あそぼうと
思っ てもって きたんだけど——。

けんきち なあんだ。そうだったのか。



が つかなかったんだよ。

てつお きよしさん、どうしたの、その まり。

けんきち これ、きよしさんの まりさ。おじさんから

いただいたんだって。

きよし まさおさん、こんどはこの まりで あそぼ
うよ。

まさお いいなあ、あたらしくて。つかっても いいの。

きよし いいさ。——さあ、なげるよ。

みんなが「ようし。」と 行って 走って いきます。

その時、まさおさんが「あつたよ、

ごむまりが あつたよ。」と っ

て 走って きます。

みんな、あつまって きます。

けんきち よかったね。

よしこ どこに あつたの。

まさお さつき さがした ど

ころさ。草の かげに

なって いたので、気

きよしさんが、ぐるぐるとうでをまわして、みんなの方へなげ

ます。そして、じぶんもみんなの方へかけていきます。

よしこわたしたち、さっきのつづきをしましう。

みどりこんどはだれのばん。

さちこよしこさんのばんでしう。

さちこさんとみどりさんが、なわをまわします。

よしこさんがとびます。

とおくの方で、まりなげをしてあそんでいる、男の子たちの

声がしています。

三月の光

(一) 月の光

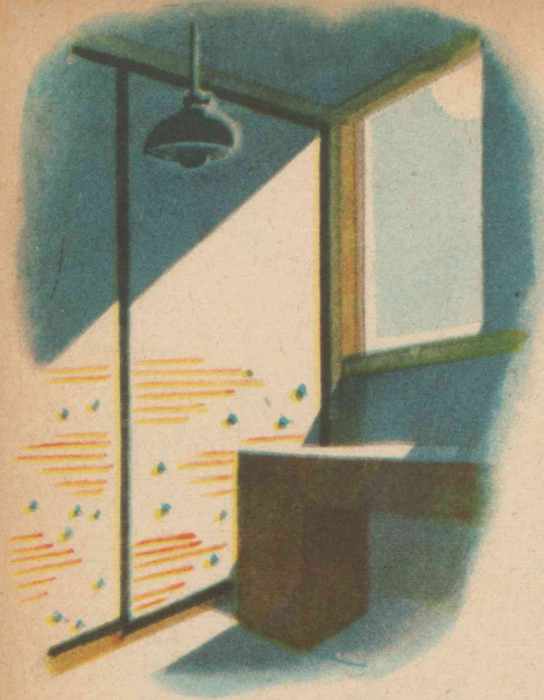
ぼくが走る。

お月さんも走る。

ぼくがとまる。

お月さんもとまる。





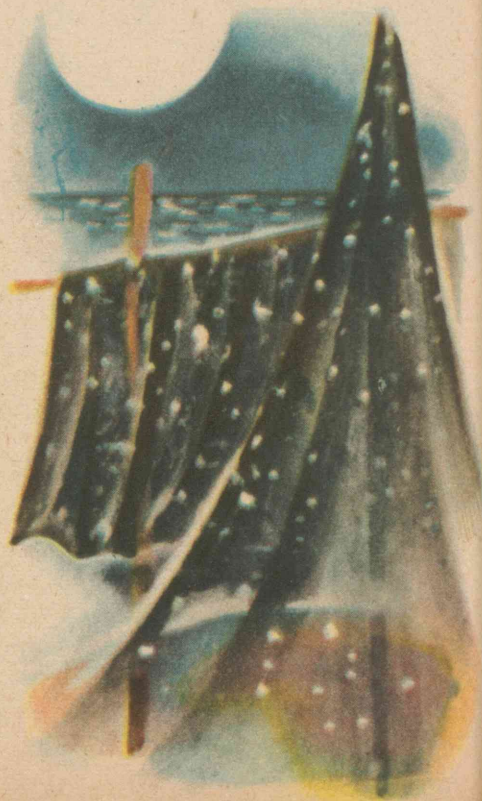
月夜の はまべに、
 あみが ほして ある。
 あみの うろこが、
 つゆのように 光るよ。

ていでんだ。
 まどから、
 月の 光が、
 きゆうに のびて きた。



月夜の 池、
 くらい 方で、
 バシヤンと こいが はねた。
 水の わが ひろがって くる。

いもの はから、
 月の 光が、
 ぽろぽろっと こぼれた。



(二) かたつむり

虫たちの おんがく会が あると いうので、お月さんは、よろこんで 山から かおを だしました。

草原に 虫たちが あつまって、お月さんを まつて いました。こおろぎ、

まつ虫、すず虫、くつわ虫などが、わに なって な

らんで いました。

みんな、バイオリンや

マンドリンなどを かかえ

て いました。くつわ虫の

子は、かわいい タンバリンを もって いました。

お月さんは、青い 光を 虫たちの 上に おくりました。

「秋の 夜」と いう おんがくが はじまりました。

しずかな 夜の 草原に、美しい 音が 流れまし



た。

お月さんは、うれしそうに じっと きいて いました。

草の かげに、一ぴきの かたつむりが しょんぼりとして いました。

かたつむりは、がつきを ならす ことも、うたを うたう ことも できないので、さびしそうに して いました。

お月さんは、



「かわいそうに。だれか、かたつむりを なかまに よんで やる もの は ないかな。」
と 思いました。

こおろぎが かたつむりを みつけました。



「おや、かたつむりさん。そこに いたのですか。さあ、こっちへ きて、なかに おはいいない。」
こおろぎが 声を かけました。

「秋の夜」が おわりました。

「さあ、かたつむりさん。こっちに いらっしゃいよ。」

虫たちは かたつむりを つれて きました。

ことばを いう ことの できない かたつむりは、
みんなの かおを みて、うれしそうに して しま
した。

お月さんは、

「よかったな。しんせつな いい 虫たちだ。」

と よろこびました。

こんどは、「月の光」という おんがくでした。

はじめは、ひくい やわらかい バイオリンから

はじまりました。だんだん 明るく、にぎやかにな

って きました。かたつむりは じっと して いる

ことが できなく なりました。

かわいい つのを

うごかして、ちよう

しを とりはじめま

した。



からだを くねくねさせて おどりだしました。

虫たちは それを みて よろこびました。すず虫
が、すずを ふりふり うたいだしました。くつわ虫
の子は、タンバリンを ガチャガチャ ならしまし
た。

お月さんは、おどって いる かたつむりの 上に、
明るい 光を おくりました。

虫たちは、おどりだしそうに がつきを ならしつ
づけました。

(三) 月夜の からす

山の 木は、みんな 色づいて いました。

ぶどうのはっぱは、下から 上まで まっかに
なって、まつの木に からまって いました。もみ
じのはっぱは、いっそう 赤い 色を つけて い
ました。

黄色に なったのや、うすもも色に なったのや、

みかん色に なったのや、いろいろな はっばが あ
りました。

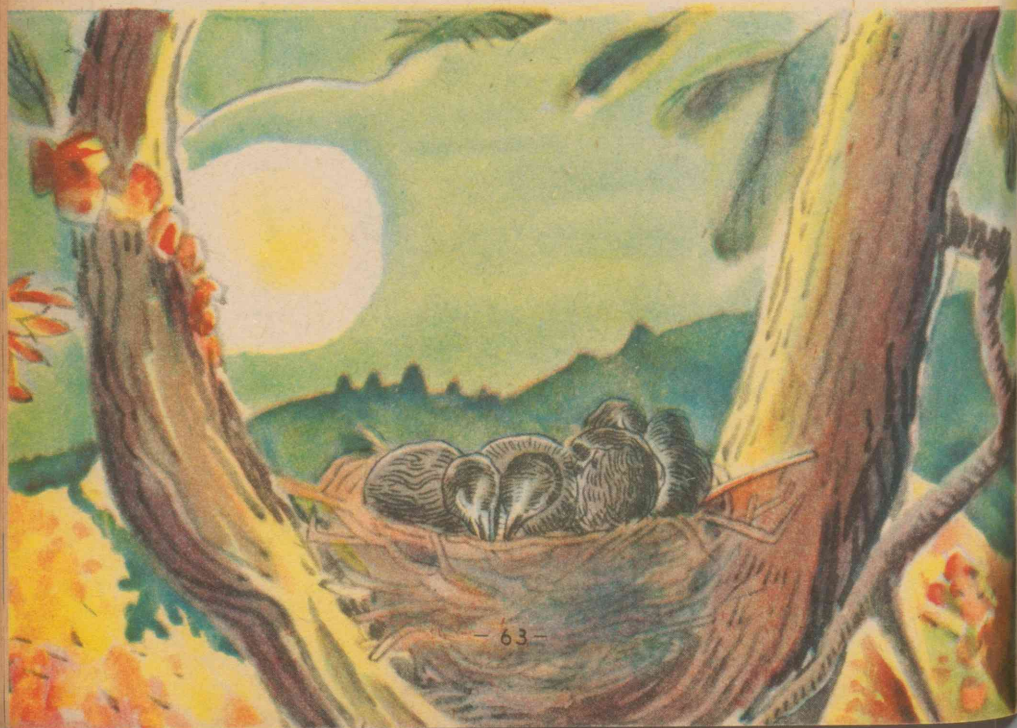
そこへ、お月さんが 明るい 光を おくりました。
あまり 明るいので、山の からすは、ふと。目を
さました。

からすは すの 中から、この しずかな 美しい
けしきを、じっと みて いましたが、この まま
ねて しまうのが おしいような 気が して きま
した。

その 時、むこうの 方
で、がやがやと さわがし
い 声 が しました。友だ
ちの からすの 声でした。

「こんな いい ばんに
ねて いられないよ。カ
アカア。」

「おきて あそぼうよ。
カアカア。」





アカア。
「カアカア、それがいい。」
「ぼくも さんせい。」
「さんせい。カアカア。」
ぼうしとりをする ことに なりま
した。からすたちは、赤組と 白組に
わかれる ことに なりました。
「よし、やろう。カアカア。」
「カアカア、おもしろいぞ。」



「カアカア、あそぼうよ。」
「みんな おこそうよ。カアカア。」
たくさんの からすが あつまつて
きました。あつちからも、こつちからも、
あつまつて きました。
「なにを して あそぼう。カアカア。」
「カアカア、かくれんぼが いいよ。」
「なわとびが いいよ。カアカア。」
「それより、ぼうしとりが いいよ。カ」

「じゃんけんをして 組を わけようよ。」

「カアカア、じゃんけんぽん。」

「あいこでしょう。カアカア。」

あちらでも、こちらでも、じゃんけんぽんが はじ
まりました。

「かった。もの、こっちへ こい。カアカア。」

「まけた。もの、あっちへ いこ。カアカア。」

一方の からは 白い ぼうしを かぶり、一方
の からは 赤い ぼうしを かぶりました。

「さあ、もう いいかい。カアカア。」

「カアカア、いいとも、いいとも。」

「よいい、ドン。」

「わあ。カアカア。」

「カアカア、わあ、わあ。」

山の 谷あい、きゆうに さわがしく なりまし
た。

ぼうしを おさえて にげて いく 白からす。

その あとを おいかけて いく 赤からす。



あちらの木のえだに頭を
ぶっついたり、こちらの木の
えだに足をひっかけたり、赤
白がいつしよになって、えだ
にぶらさがったりするので、
木のはっぱがちらちらとち
りました。

このさわぎで、山の谷あい
では、りすが目をさましまし
た。

きつねが目をさましました。
たぬきが目をさましました。
みんな、すの中から、からす
のぼうしどりをみました。
白からすも赤からすもいつ
しよけんめいなので、なかなか
かちまけがきまりません。
「ああ、つかれた。カアカア。」



だれかが いました。これを きいて、みんなが
思いだしたように、

「カアカア、つかれた」

「つかれた」

と 行って、木の えだに とまって 休みました。

すっかり あせを かいて、ぼうしで かおを ふ
いて いる からすも います。シャツまで ぬいで、
ゆげを たてて いる からすも います。

「カアカア、ねむく なった」

「ほんとうだ。ねむい、ねむい」

一わの からすが、すの 中へ かえって いきます
した。

「ぼくも かえろ。カアカア」

「かえろ。カアカア、かえろ」

からすたちは、みんな すの 中には 行って し
まいました。はいつたかと 思うと、もう ぐうぐう
と ねむって います。

これを みて いた りすも、きつねも、たぬきも、

ねむって しまいました。

お月さんは いつの まにか

西の 山に かくれました。

東の 方が 少し 明るく

なって、夜あけの 風が そよそよと ふいて きま

した。風は からのすの うちを のぞいて みました。

赤からすと 白からすが、頭と 頭を くっつけて

ねて いるのも ありました。

風は、そつと 谷の 方へ おりて きました。



四 みんなの本

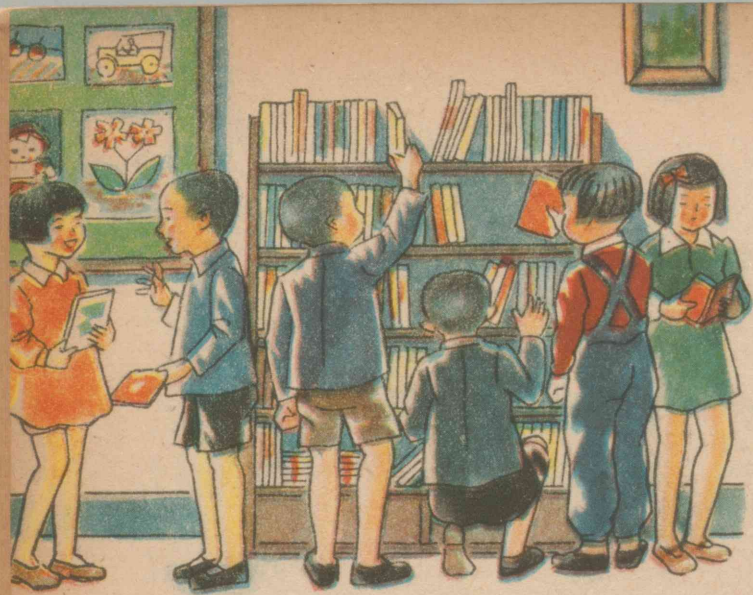
(一) 文この本

まさおさんは、教室の 文こを かたづけながら、

「文この 本が、もつと たくさん あったら いい
なあ。」

と いました。

「うちから もつて きましようよ。」



と、よしこさんが いました。

まさおさんたちは、うちで 読んで しまっ
て いらなくなつた 本を、もつて くる こと
に しまし
た。

ひさしさんも もつて きました。みどりさん
もつて きました。

「いい ことに 気が つきましたね。」

と、先生も およろこびに なりました。

みんなで だいに して 読みました。

文この 本が、だんだん 多く なつて きました。

大きな 本、小さな 本、いろいろな 本が、本だ
な に いらまじつて います。

みんなで そうだんを して、き
ちんと かたづけ ること
に しま
した。

「本の 大きさを ならべかえたら
どうだろう。」

と、ひさしさんが いました。

「ぎっしりだけべつにしたらどうでしょう。」
と、みどりさんがいいました。

おはなしの本、うたの本、しばいの本、まん
がの本、え本、ぎっしりなどと、わけてならべる
ことにしました。

本のやぶれているところをはりつけたり、
紙をはったりしました。

本だながきれいになりました。

本がえらびやすくなりました。

ひょうごをみんなで考えました。

○だいに しましう、みんなの本。

○ゆずりあつて 読みましう。

○読んだら、もとにかえしましう。

先生が、それを色紙に書いて、本だなに
はっ
て くださいました。

(二) 読んだ本

本を 読んだ あとで、ときどき はなしあいを
する ことに しました。

木の年

ひさしさんが、

「木を 切った 切り口に、まるい わが あります。」



あれで、どんな ことが わかりますか。」

と、みんなに ききました。

まさおさんが、

「わの かずで、木の 年が わかります。もし、わ
のかずが 二十 あったら、その 木が 二十年
たったと いうことにな るのです。」

と こたえました。

「そうです。この 本に、その ことが 書いて あ
ります。」



「ねこが近づいてきたら、すぐわかるようにしたいものだ。」
と、一ぴきのねずみが



ていました。

『このごろ、わたしたちのなかまが、ねこにどられてこまる。どうにかして、とられないように』
にするくふうはない。ものか。』

と、いうそうだんでした。

『ねこが近づいてきたら、すぐわかるようにしたいものだ。』

と、一ぴきのねずみが

ひさしさんは、その本をみんなに知らせました。

「ぼくも、その本で知ったのです。」
と、まさおさんがいいました。

ねずみのちえ

よしこさんが、本で読んだおはなしをしました。

「ねずみがたくさんあつまって、そうだんをし

いいました。

みんな、しばらく考えて いました。

その時、わかい 一ぴきの ねずみが、

『そうだ。』

と 行って、ひぎを ぽんと たたきました。

『ねこの くびに、すずを つける ことに したら

どうだ。』

みんなは かんしんして、

『そうだ。そうだ。それが いい。』

と さんせいしました。

さつきから、だまって いた 年よりの ねずみが、

『それでは、いったい、だれが ねこの くびに、そ

の すずを つけに いくのだね。』

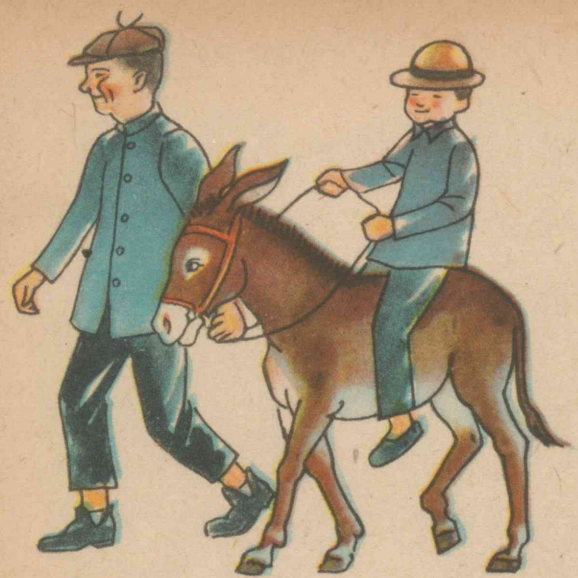
と いうと、みんな だまって しまいました。

『おもしろいなあ。』

と 行って、みんなが 手を たたきました。

『ぼくたちが ねずみだったら どう。するだろう。』

みのるさんが、わらいながら いました。



「おや、あの 子は、年よりを 歩かせて いるよ。」
 と いました。
 「なるほど。」
 そこで、子どもが おりて、お
 どうさんを のせて 歩いて い
 きました。
 また、人が きて、

ろばと 親子

親子が、ろばを ひいて 歩いて いました。

むこうから きた 人が、

「ひとり のって いったら

いいのに。」

と いました。

「なるほど。」



おとうさんが、子どもを のせて 歩いて しま
 した。また、むこうから 人が きて、

「おや、あの 子は、年よりを 歩かせて いるよ。」

と いました。

「なるほど。」

そこで、子どもが おりて、お

どうさんを のせて 歩いて い

きました。

また、人が きて、



た。村はずれの橋の上にきました。
 こんどは、ふたりでろばをかついでいきました。

「わあい、わあい。」

「ろばをかついでくるよ。」

村の人たちがわらいました。

ろばは、びっくりしてあばれ

だしました。

ろばは、とうとう、川の中に
 とびこんでしまいました。

「子どもを、歩かせるなんて、
 かわいそうに。」
 といいました。

「なるほど。」

こんどは、子どももいっし

よに、のっていくことにしました。

また、むこうから人がきていいました。

「ふたりものって、ろばがかわいそうだ。」

ふたりはこまってしまいました。



学しゅうの手びき

一、まつ林

町や村のためにつくした人の、はなしや、つたえばなしなどを、はなしあいながら学しゅうしましょう。

(一) すなはま

あなたも、海にいったときの おはなしをしましょう。

この文をよんで、どんなきもちがしますか。文は四ぎょうづつになって、いますが、そのひとつひとつは、おもになにをかけたものでしょう。

(二) まつ林

栗田さんのことを、あなたも おはなしがで

きるようにしましょう。

栗田さんが えらいと 思った ところを かきだしましょう。

あなたの 町や村の ために、つくした 人の おはなしを しましょう。

この 文の どちらうで、ぎょうを あけて あるのは なぜでしょう。

三 はごろも

これは、うたったり、はなしを したり して する しばいです。

あなたも、この しばいを しましょう。

まえの「本の、「魚つり」の 学しゅうの手びきの ことを、思いだして しましょう。

(二) はれた日

うんどうの ことを かけた みじかい 文です。うまく かけて いるのは どこでしょう。

あなたも、うんどうした ことや、あそんだ ことを みじかい文に かきましよう。

みた 通り、思った 通りに かけて いるか、よく おおしながら かきましよう。

(三) ごむまり

あなたも この しばいを しましょう。

あなたたちで ぶたいを くふうして つくりましよう。

ぶたいに、でたり はいたり する ことが 必ずかしくなつて いますから、くふうを しましょう。

三 月の 光

二 ごむまり

この しばいを、ふつうの おはなしに して、はなしが できるように しましょう。さしえが、なぜ こんなに なつて いるか、かゝんがえて みましよう。

うんどう会や うんどうを した ときの ことを 思いだしながら、学しゅう しましょう。

(一) たまの ふん水

たまいを した ときの ことを はなしあい しましょう。

まさおさんの かけた、三つの みじかい 文が、どんなに かわつて いるか しらべて みましよう。

あなたも、かけた 文を なおすように しましょう。

秋の つくしい お月さんを 思いうかべながら
学しゅう しましょう。

(一) 月の光

みじかい 文ですが その ありさまが くわしく
く わはなし できるように よみましょう。
あなたも お月さまや 月夜の ありさまを 文
に かきましょ。

(二) かたつむり

おはなしが できるように よみましょう。
どんな ところを おもしろいと 思いましたか。
思った ことを はなしあいましょ。
あなたも こんな おはなしを 考えて みま
しよ。

(三) 月夜の からす

どんな おはなしが かいて あるでしょ。
おもしろいと 思った ことを はなし あいま
しよ。

美しいと 思った ところを 書きだましょ。
風が、そつと 谷の 方に おりて いったのは
なぜでしょ。
なが、 文も、おわりまで しっかり よまし
しよ。

四 みんなの本

学きゅう文こや、としよかんの ことを 学しゅう
しましょう。

(一) みんなの本

あなたは、どんな 本を もつて いますか。
あなたの 学きゅうや、学校の 文こは、どんな

○ねずみの ちえ

どんな ところを おもしろいと、思いましたか。
あなたが ねずみだったら どうしますか。
思った ことを はなし あつて みましょ。
あなたも おもしろいと 思った おはなしを
しましよ。

○ろばと 親子

おはなしの すじを はっきりしましよ。
どんな ところを おもしろいと 思いましたか。
ろばを 川の中に とびこませないように する
には、どうしたら よかったでしょ。
その ことを 文に かいて みましょ。

に なつて いますか。

まさおさんたちは、どんなに して 本を あつ
ゆたでしょ。

本を どんなに して せいどんしたでしょ。

みんなで、たのしく 本を よむには どうした
ら、いいでしょ。

(二) 読んだ 本

あなたも 読んだ 本の おはなしを しまし
しよ。

○木の 年

あなたも、本で したつたことや、しらべた こと
を はなしあいましょ。

友だちの はなしを きを つけて ききましょ。
しよ。

あなたも こんな 本を 読みましょ。

あたららしい ことば

- 4 まつ すなはま
- 5 はだし 波
- 6 ワイシャツ かみ
- 7 毛
- 8 根もと かこ(んで)
- 9 うずめ(られて) ふぶき
- 10 どうにか(して) くいとめ(たい) ところが
- 11 くれ(て) ぐみ ふせ(いて)
- 12 すなじ
- 13 つれて
- 14 青々 ぶりかえ(って)
- 15 天人 りようし まつ原
- 16 ふじ ほんのり

- 30 おうえん かご
- 31 よけい
- 32 なおし(て)
- 33 まるて カ
- 34 ほめ(て)
- 35 リレー バトン
- 36 そつて
- 37 ダンス わ
- 38 ねずみ ちぢまる
- 39 げた グロトフ
- 40 へい
- 41 ごむまり ひるすぎ
- 42 こなかつた まり
- 43 たしか へん
- 44 いたずら はず

- 16 ま(って) はごろも
- 17 はまへ
- 18 きもの 近づい(て)
- 19 かなし(そう)
- 20 かいがら
- 21 たからもの
- 22 たいえ
- 23 おき(どく) おゆず(り)
- 24 おぼろ月 都
- 25 十五や ふえ
- 26 みとれ(て)
- 27 たもと
- 28 うんどう会
- 29 ぶん水 たまいれ
- なつかしい

- 44 うしろ
- 45 (一)だ(けど)
- 46 (しらない)ふり
- 47 さつき
- 48 こんど
- 49 うで (だれの)ばん
- 50 くら
- 51 あみ
- 52 ていでん
- 53 かたつむり
- 54 おんがく会
- 55 虫
- 56 バイオリン
- 57 マンドリン
- 58 タンバリン
- 59 (声)かけました
- さびし(そう)
- にぎやか
- ちようし

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	キ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	ク	イ
	ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ケ	ウ
	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	コ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

パ	バ	ダ	ザ	ガ
ピ	ビ	ヂ	ジ	ギ
プ	ブ	ヅ	ズ	グ
ペ	ベ	テ	ゼ	ゲ
ポ	ボ	ド	ゾ	ゴ

ピ	ヂ	ジ	ギ	リ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ
ピ	ヂ	ジ	ギ	リ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ	ユ
ピ	ヂ	ジ	ギ	リ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ	ヨ

73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60
西 教室 たくさん	東 文こ	西 ゆげ	東 あせ	東 かちまけ	東 あせ	東 あせ	東 あせ	東 あせ	東 あせ	東 あせ	東 あせ	東 あせ	東 あせ

87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74
かついで	かついで	子ども	そば	年より	くび	こまる	知らせ(ました)	かず	年	(えらび)やすく	まんが	多い	いらなく

海 (4)
波 (5)
毛 (6)
根 (8)
步 (10)
氣 (10)
遠 (13)
天 (14)

用 (23)
同 (24)
都 (25)
秋 (26)
雪 (26)
雲 (28)
会 (29)
文 (30)

書 (30)
考 (32)
力 (33)
古 (42)
虫 (54)
美 (55)
明 (59)
黄 (61)

組 (65)
谷 (67)
頭 (68)
西 (72)
東 (72)
教 (73)
室 (73)
読 (74)

多 (75)
切 (78)
知 (80)
親 (84)

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

はごろも 栗原一登
ごむまり 栗原一登
かたつむり (児童作文より)
月よのからす 石森延男
さし絵
関合正明 檜原健三
高橋庸男 三井正登

株式会社 光村原色版印刷所図案部
そうてい

小国216 しんこくご二年中
ごむまり

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE DEC. 14, 1949)

昭和二十四年十二月十四日 印刷
昭和二十四年十二月十八日 発行
昭和二十五年九月十四日 再版発行

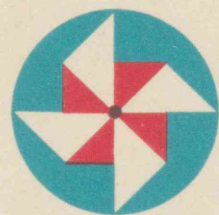
著作者 垣内松三
八木橋雄次郎

発行者 東京都品川区東大崎一丁目五三番地
光村図書出版株式会社
代表者 大江恒吉

印刷者 株式会社 光村原色版印刷所
東京都品川区東大崎一丁目五三番地
代表者 光村利之

発行所 東京都品川区東大崎一丁目五三番地
光村図書出版株式会社

定価五十円



2

中

なまえ

広島大学図書

0130449762



図書出版株式会社

文庫

49

762